

エデュコ
Educo
学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.60
2023年

野村 萬齋さん

狂言師
巻頭インタビュー p.2



知っておきたい教育 NOW p.4

- ① 各教科等の学習の基盤となる言語能力について
- ② VUCA時代を生きる子どもたちのためにまずは私たち教師が予定調和な授業を脱しませんか？

きょういく見聞録 p.8

「不易流行」を教育基本に
「産官学民の知のリソース」を活用した教育の創造

地球となかよしトピックス p.10

地域に支えられ、愛されて35年
～天城連峰太鼓の取組～

Information 北から南から p.12

第20回 地球となかよしメッセージ入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18

【連載第1回】
『草枕』脱線雑談①
こんな時だからこそ、芸術

Front Runner p.19

【連載第2回】
地域の実践からこどもの貧困に立ち向かう

ほっとな出会い p.20

バイオリニスト 式町 水晶さん

時代も国も軽々と飛び越えて ～狂言の普遍性と可能性～

狂言師 | 野村 萬齋さん

「普通」になりたかった子ども時代

小さい頃は近所の池でザリガニやオタマジャクシをすくったり、友だちとメンコやベーゴマ、ヨーヨーで遊んだり、のびのびした幼少期でした。

初舞台を経験したのは3歳の時、猿回しの子猿の役です。その頃から稽古が始まって、以来ずっと学校から帰ってきたあとや休みの日には父から稽古を受けてきましたので、そういう意味では特殊だったかもしれません。

父からは狂言師になれと直接言われたことはないのですが、何となくそうし向けられているとは感じていました。しかし母親がわりと新しいもの好きなところがあったので、その影響でビートルズやカーペンターズを聞いていましたし、バンドを結成してギターを弾いたり、バスケットボールに夢中になったり、狂言とは関係のない活動にも打ち込んでいました。

成長するにつれて稽古もだんだん厳しくなってきた、舞台がある時には林間学校に行けなかったり、運動会を早退したり、部活の試合に出られなかったりすること。自分が普通とは違うんだとおのずと自覚するようになりました。当時は人と違っていることがすごく嫌で、自分が狂言をしていることは学校の友人にも全く話していませんでした。

忘れられない先生

小学校1年生・3年生の時の担任は国語の先生で、ご自身も句集を出されたり、俳人でいらつしゃったこともあって非常にユニークな方でした。私は狂言をやっているせいか、文章を書く時はどうしても音読しておもしろい文章を志向するところがあります。自分では意識していなかったのですが、私の文章のリズム感とか、音読した時のおもしろさをすごく褒めてくれました。それ以来、文章を書くことをそん

嫌がらなくなったかな。やはり褒められると人間うれしくなりますからね。

4年生から6年生の時の担任は道徳の先生でした。先人から多くを学ぶという教育方針で、偉人の本をたくさん読まされた。ある時、友

だちが失敗したのを見た私は大笑いしてしまい、先生に厳しく叱られました。当時の私は運動も割合できたし、成績もかなり上のほうだったので、ある種クラスの人気者というか、周りからややほやされることもあって、少し生意気になっていたのかもしれない。「君は成績もよくて人気者なのに、学級委員になれそうでなれないのはそういうところだ。みんなの要望を獲得しないといけない」と強く言われました。当時はショックを受けましたが、人の失敗をあげつらつてはいけなさと身にしみて理解できたのはその先生のおかげなので、一番強く心に残っています。

アイデンティティ・クライシスに悩んだ日々

狂言師の家に生まれ、普通の人と違うことをどう受けとめたらいいのか、随分と悩んだ時期がありました。「表現者になりたい」という思いはわりと早くから芽生えていたのですが、型や約束事を押しつけられるように感じていた狂言の世界では、表現者たることはできないと思っていたのです。そんななか、17歳の時に『三番叟』を披いたのは大きな転機となりました。一定の格式ある曲を初演することを「披く」とい



PROFILE

1966年、狂言師・野村万作の長男として東京都に生まれる。東京藝術大学音楽学部卒業。重要無形文化財総合指定者。芸術祭新人賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞、芸術祭優秀賞等、他受賞多数。演出・主演舞台『子午線の記り』で毎日芸術賞千田是也賞、読売演劇大賞最優秀作品賞受賞。21年、観世寿夫記念法政大学能楽賞、22年、松尾芸能賞・大賞受賞。2022年3月まで20年間、世田谷パブリックシアター芸術監督を務めた。東京藝術大学客員教授。2021年4月より石川県立音楽堂邦楽監督、公益社団法人全国公立文化施設協会会長。

うのですが、自分の技術が飛躍的に伸びていくことを実感することができ、自分なりの成果を感じられたのです。それまでギターやピアノなどさまざまなことに挑戦してきましたが、自分にとってのアドバンテージはやはり狂言にあると思えました。最終的に方向が定まったと自覚したのは、28歳でイギリスに1年間留学した時です。海外に身を置き、自分を外側から見つめることで、己を相対化するというのはいかがでしょうか。日本人として表現するとはどういうことか、日本人であるということのアイデンティティをどう捉えていくべきか、固まっていた気がします。

狂言師が存在する意義

狂言は「この辺りの者でござる」という第一声が始まりますが、これは多様性を表す言葉そのものとも言えます。狂言には昔も蚊も登場しますが、人間だけではなく犬や猫や猿も、みんなある種「この辺りの者」として、同等の権利をもって生きています。私たち誰もが「この辺りの者」として等しくあるという発想が狂言にはあるのです。近年、ダイバーシティや多様性という言葉がさかんに叫ばれていますが、日本人は八百万の神々の時代から多様性を意識し

ていて、狂言が生まれた七百年前にはすでに共通の認識だったのです。

狂言の登場人物は観客の欲求を代弁してくれるような存在で、有名な「附子」でしたら、主人に桶の中を「見てはいけない」と命じられていたのに好奇心や食欲に負けて盗み食いしてしまい、結局怒られる。観客の代わりに失敗したり、おいたをして叱られてくれることで、観る側にとって代償行為になるといえるか、カタルシスを感じるのです。そういう精神の浄化作用みたいな役割が文化や芸術には本来あって、そのために私たち狂言師はいるんだなと感じます。私が狂言をすることで、皆さんのストレスや鬱屈しているものを多少なりとも軽減できるのではないかと思っています。

狂言にみられる多様性や、自然に寄り添って生きていく日本特有の考え方も、日本人にとっては当然でも海外においては決して当たり前ではない。そこに、日本人が世界の役に立ることがあるような気がするのです。

教育現場に生かせる「型」の教え

もう30年くらい前、「キレる」子どもがいて初めて聞いた時、自己表現や発散



の仕方がわからなくて、たまっていたものが堰を切ってしまうのかと想像しました。

狂言には「型」があるので、師匠は弟子に型を教えるなかで、自己を表現するプログラムをダウンロードしていきます。鷹やライオンが狩りを見せて子どもが覚えるように、師匠である父やお祖父さんが型をやってみせて、子どもはそれを真似する。学ぶの語源は「まねぶ」、つまり真似することだと言いますが、それをまさしく実践しているのが狂言の世界なのです。

いきなり表現しなさいと言っても子どもはできるわけではないので、やり方をまず教えてあげる。「型の文化」「型にはめる」というのは決して悪い意味ではなく、そうした回路を作ってあげる、プログラミングしてあげるという意味で重要です。その回路さえ習得してしまえば、そこから先の発散する段階はおのおのの個性でやっていけるでしょう。それぞれの個性はちゃんと型にも反映されるものです。型が行きすぎれば自由教育も必要だし、自由教育も行きすぎれば型が必要。私は車の両輪のように両方必要だと思っています。

伝統芸能出身の役者と違って、現代劇の役者さんはあまり「型」をもってないのですが、それでもうまい役者さんは自分の方程式というか、演技の方法論をちゃんと身に付けているものです。ご自分で型を編み出したのか、どこかで勉強して身に付けられたのか。そういう意味で言うと、やはり学校の先生も生徒たちに「型」の身に付け方を自ら実践して見せてやり、実際に使ってみせることが大事かと思っています。先生たちが自信をもってアクティブにやれるよう、環境を整えてあげるのも重要ですね。

時代も国も超越する狂言の懐の深さ

オリンピックの演出などに携わって実感したのですが、親から子、子から孫という継承の文化が、今の時代は非常に希薄に

なつたと感じます。個の文化が進むのは悪いことばかりではないのですが、多くの失敗を経た経験者が身近にいてくれるのは、いろいろな生き方を教えてもらえる点で得るものがすごく多い。歴史から学ぶ、伝統から学ぶことが少なくなってきた今の世の中で、戦争はいけないとわかっているのに繰り返す人は、どうも歴史を振り返っていないのではないかと思っています。気候変動など環境問題においても、受け継がれてきたものから謙虚に学ぶ、先人の叡智を振り返る姿勢が必要だと思います。

今年の3月に「狂言ござるの座」で父・万作と息子の裕基と共演します。いま、息子は教えた型どおり忠実に演じますし、私は型を身に付けた上で年齢と共にだんだん経験値を生かす段階にありますが、90歳を過ぎた父などは型から一種解脱する境地に入っているのです。狂言三代による芸の三段階が観られる貴重な機会です。で、ぜひ皆さんにお越しいただきたいです。

同じ3月には狂言ならではの手法を取り入れた舞台「ハムレット」も控えています。実は狂言はシェイクスピアと似ているところがたくさんありまして。お互いにセツトも何も無い素の舞台で演じていたので、省略の文化が共通しています。亡霊を描くのは能の専門ですし、日本人の演出や表現のほうが、かえってシェイクスピアの言いたいことを的確に伝えられる気がします。狂言師としてのアイデンティティを最大限に生かした「ハムレット」を、今日的に一番刺さる形でお見せしたいと思っています。

時代の変化に対応して狂言も進化し続ける

テレビや映像がない時代から続いてきた狂言という芸能を先人から受け取って今の時代に演じる場合、時代の変化をどう捉

えるか、今度どう継承するのかということを考えなければなりません。

能・狂言の伝統的な裸舞台のような、一種何もない空間で演じること、CGでも何でも出せる環境で演じることがやはり違いがあります。

基礎となる確固とした考え方、「型」が自分にあつた上で、それをアップデートして、時代に即して進化させていく。それが短期的ではなくて中・長期的に受け継がれるかどうかまで考えなければいけない。

古典に新たな試みを加えていくことは全く問題ないと思っています。古典というのはその本質は揺るぎないものだと確信している。時代や場所、セットがどれほど変わっても、見立てによって観客の想像力に訴え、想起されるものが一緒であれば問題ないと思います。

余白のある舞台のなかで、観客が見立てにより想像力を働かせることが本来の狂言の舞台のあり方なのですが、現代は想像を膨らませる余地もなく何もかもが具体的にたつてしまふ世の中。しかも「わからないことはよくない」という風潮があつて、テレビのニュースでさえ全部字幕を出します。こういう状況では、わかるうとする気持ちの人々のなかからなくなつてしまふのではと心配になつたりもします。わからないことがある時はそれについて調べ、自分なりに追求するための絶好の機会。「わからない」は、ある意味勉強するチャンスとなります。

教育現場においては、子どもがそこで学び遊ぶための《余白》の部分を作つてあげる、想像の余地をあえて残しておいてやることも重要ではないかなと、狂言師としては思いますね。

各教科等の学習の基盤となる言語能力について



東京学芸大学
教授 中村 和弘

た、その教科等で学ぶ内容や技能を効果的に身につけることが、ねらわれていたはずである。

言語活動の充実、思考力・判断力・表現力の育成、確かな知識・技能の習得は、いわば三位一体のものとしてデザインされていたと思うが、実際の授業ではうまくはいかなかったケースもあったように思う。話し合いに代表されるように、言語活動の充実が突出してしまったのである。どうすればよかったのだろうか。

教科の言葉に慣れる

私は、「教科の言葉に慣れていく」という視点が抜けていたことが、その要因の一つではないかと考えている。

例えば、理科の学習で水の三態変化を習うとき、温めて沸きたっていく様子を観察しながら、子どもたちは「ぶくぶくしてきた」「泡がいっぱい出てきた」「沸騰してきた」など、いろいろな言い方で、その様子を口にするだろう。教師は「いったん、その子の生活から立ち上がってくるこうした言い方を受け止めつつ、ここで「沸騰する」という科学の言葉に出会わせる。教科書を読んで確認したり、教師の説明を聞いたりしながら理解を深めつつ、肝心なのは、自分たちでも「沸騰」という科学の言葉を使ってみることである。

教育課程全体に位置づけられた。

当時、参画していた校内研究の取組などを思い返すと、さまざまな授業で話し合いの活動が盛んに行われていた。その取組自体は、今日の「対話的な学び」や「協働的な学び」につながるもので、価値あるものであったと思われるが、同時に、「話し合いにこんなに時間をとってよいのか」「話し合いを充実するための手立ては効果的であったが、教科の学習として本時のねらいはどれほど達成できたのか」などの議論が、授業後の協議会でずいぶん行われていたことも思い出される。

本来、言語活動の充実には、書いたり話し合ったりするなど「思考の言語化」によって、その教科等で育成を目指す思考力・判断力・表現力等を育み、ま

ポイント

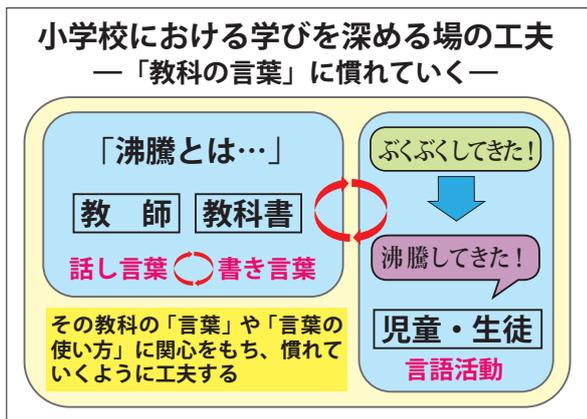
- ① 「言語活動の充実」の取組では、各教科等で話し合いなどの工夫が試みられたが、実際の授業では課題も多かった。
- ② 学習活動を通して、教科の言葉になじんでいくことが大切。どのような言葉をとどう扱うかがポイントである。
- ③ 教科書や活動の中の言葉を、子ども自身がキャッチできるようになる。「言葉のアンテナ」を高くしていく。

「言語活動の充実」を振り返って

各教科等の学習を支える言語活用能力といったとき、まず思い出されるのが、先の平成20年版の学習指導要領である。このとき、各教科等での指導に際して、

各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。

とされ、いわゆる「言語活動の充実」が、



「沸騰」という言葉を使つて気がついたことを話し合ったり、あるいは、「沸騰」という言葉を入れて観察したことをノートにまとめたり振り返りを書いたりする。このように何度も「沸騰」という言葉を使うことで、「ぶくぶくしてきた」という言い方から「沸騰してきた」という科学的な表現ができるようになっていく。生活の言葉が科学の言葉に置き換えられていくのである。

言語活動の充実とは、生活の言葉が教科の言葉に置き換わっていくこと、あるいは、新たな教科の言葉と出合いなっていくこと、そういうことだと考えるのではないだろうか。

だから、「言語活動の充実」の取組

で大切だったのは、どう話し合わせるかではなく、どのような「言葉」を使つて話し合わせるか、ということだったのではないかと思うのである。その単元の学びにおいて、重要となる「言葉」を使つて、さまざまに書いたり話したりできるような時間と場が意図的に用意されることで、子どもたちはいつの間にか、その教科の言葉になじんでいく。その結果、「沸騰」についての知識を身につけるとともに、「沸騰」という言葉を使いながら、関連する事象を観察したり思考したりすることができるようになる。

先に述べた、言語活動の充実、思考力・判断力・表現力の育成、確かな知識・技能の習得の三位一体は、実はこうしたかたちで実現するものであると考えられるのである。

「言葉のアンテナ」を高くする

同じ日本語で書かれていても、各教科等には、その教科特有の言葉の使い方がありそうである。

例えば、片上宗二氏によれば、社会科の授業で使われる言葉の問題には、種類と量の多さのほかに、「いいかえ用語」「間違いやすい・紛らわしい用語」「あいまい用語」「抽象度の高い用語」「価値的言葉」があるという。ま

た、氏は、「社会科授業の特徴の一つは、他の教科では考えられないような日常語が、学習の『キーワード』として使用されることにある」として、「工夫や努力」「様子」「さかん」などの言葉を挙げている。(片上宗二『社会科教師のための「言語力」研究』風間書房、二〇一三年)。

同様に、理科には理科でよく使われる言葉や表現の特徴があり、体育には体育の、算数には算数の…という具合に、それぞれ言葉の使われ方があるということになる。

つまるところ、バトラ後藤裕子氏が「子どもたちは、最終的には教科書で使われている語彙や文法をマスターし、それぞれの教科の意味構築のあり方に慣れていく必要がある」(バトラ後藤裕子『学習言語とは何か』三省堂、二〇一一年)と指摘するところが、ひとつのゴールとなるだろう。

そのゴールに向けて、その単元でどのような言葉に出会わせ、その言葉について教科書の記述や教師の説明を通して、どのように理解を深めさせ、そして、どのように書いたり話し合ったりする言語活動を通して、子どもたちに慣れさせ、なじませていくか。各教科等の学びを豊かにする言語活用能力の育成に際して、ま

教科等の学習における学びを深める

子どもたちは、最終的には教科書で使われている語彙や文法をマスターし、それぞれの教科の意味構築のあり方に慣れていく必要がある



ずこうした点を確認するところが出発点になるのではないだろうか。

各教科・領域の内容は、文字や音声という言葉によって、また言葉を使うことを通して学ばれていく。子どもたちが自身の「言葉のアンテナ」を高くすることで、教師が言葉一つ一つを取り上げなくても、内容を説明している言葉や、やりとりの中で交わされる言葉に着目できるようになる。そのことが学習内容の深い理解にもつながっていくだろう。

教科等の学習を支える言語活用能力について、まず、先の学習指導要領で掲げられた言語活動の充実の取組を振り返ることで、再考してみた。

VUCA時代を生きる子どもたちのためにまずは私たち教師が予定調和な授業を脱しませんか？



東京都江戸川区立船堀第二小学校

指導教諭 藤原 隆博

ポイント

- ① 子どもと共に学習計画を立てる際、大まかな方向性を示しつつも、問いの内容は委ねる。
- ② 一人一人にとって最適な学習方法を子ども自身が選択し、実行することで学びは個性化する。
- ③ 20〜30分の個別学習の場はVUCA空間。教師はOODAループを回すことで「指導の個別化」を図る。

子どもと共に学習計画を立てる際、大まかな方向性を示しつつも、問いの内容は委ねる

「ぼくの世界、君の世界」（教育出版6年下）という、西研氏が書いた説明的文章がある。私の学級では学習計画を立てる際、筆者の論の進め方を読み解くために、どのような問いを立てるのか、を子どもに委ねた。グループで対話をしたり、学級全体で交流したりする場が個々の問題意識と噛み合うように、予め「第4時は筆者の主張についての問いを立てよう」「第5時は説明の工夫についての問いを立てよう」など大まかな方向性を指定した。しかし、具体的にどのような問いを立て、どのような方法で追究するのかは、

個々に任せた。「自分だけの心の世界とは何だろう」という問いを立てる子もいれば「伝え合うための努力とはどのようなものだろう」という問いを立てる子もいた。単元の後半になるにつれ、問題意識がより多様化することを踏まえ「第6時は筆者の主張を更に追究するのか、説明の工夫に対する考えを深めるのか、自分自身で決めよう」と、自由度の高い投げかけをした。同じ1時間の中で「『一人きりの自分』とはどういう意味だろう」と、筆者の主張について考える子がいたり「筆者は事例の順序をどのように工夫しているのだろう」と、論の進め方を考えた子がいる状況だ。第4時〜第6時には、1単位時間の中で、20分〜30分は個別学習の時間となる。学習計画は、学習の状況次第で柔軟に変更し

日	授業の振り返り	学習の振り返り	学習の振り返り
9/1	①「ぼくの世界、君の世界」全体の構成を把握。9月、自家学習で全体の構成を学習。	① 読者の視点から読み取った点、自分なりに考えた点、どんな疑問や考えをもちたかを振り返る。	① 単元より、単元全体の振り返り。
9/2	② 学習計画の作成。学習計画(1日目)	② 学習計画の作成。学習の見直しをもつ。	② 単元より、単元全体の振り返り。
9/3	③ 「ぼくの世界、君の世界」の構成を把握。9月、自家学習で全体の構成を学習。	③ 「ぼくの世界、君の世界」の構成を把握。9月、自家学習で全体の構成を学習。	③ 単元より、単元全体の振り返り。
9/4	④ 「ぼくの世界、君の世界」の構成を把握。9月、自家学習で全体の構成を学習。	④ 「ぼくの世界、君の世界」の構成を把握。9月、自家学習で全体の構成を学習。	④ 単元より、単元全体の振り返り。

図1

てもよいことを伝えた(図1)。こうした学習計画づくりは、いきなりできたわけではない。4月から各単元の学習計画づくりをする際、大まかな方向性に基づく問いの立て方の指導を積み重ねた末に、少しずつできるようになっていった。自らの問題を自らの方法で解決しようと試み、その結果を共有し合い、加筆・修正を加えるプロセスを重ねることで、教師が主導しなくても、子ども自らが動き出せる学習環境が整い、「主体的に学習に取り組む態度」が育ってきた。教師の役割は、子どもが立てる問いの方向付け、学習方法の提案、個別学習の際に手がかかりとなる視点を示すこと等、個々に指導・助言する役割が主になる。個々の学びの価値付けをしながら全体に紹介し、本時の学習の方向付けをすることも大切だ。学級全体に必要な指導事項

は、個別学習を中断し、即座に全員に伝えることが望ましい。

一人一人にとって最適な学習方法を子ども自身が選択し、実行することで学びは個性化する

第4時〜第6時、子どもたちは「ぼくの世界、君の世界」を読む際、複数の思考ツールの中から自ら最適だと思うものを選択し、自分に合った方法で読み解いたことを表現した(図2)。

思考ツールだけではなく、図3のように、ノートに自由なレイアウトで記述する子どももいた(図2-①、②や図3は、すべて第6時)。

ここで大切なのは、一人一人にとって最適な学びの方法を子ども自身が選択することだ。教師の都合

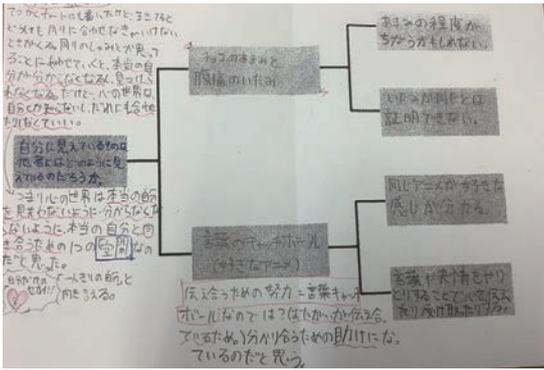


図2-① 「ロジックツリー」を使用した子

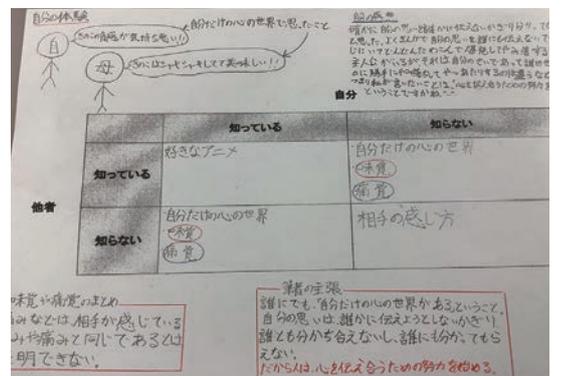


図2-② 「ジョハリの窓」を使用した子

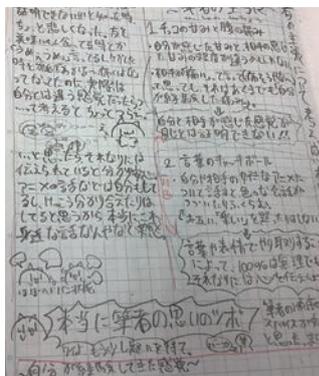


図3

で、子どもに一つの方法やワークシートを押し付けけない、ということだ。

これらを Microsoft Teams にて共有したことで、加筆・修正する動きが活性化した。

20分〜30分の個別学習の場はVUCA空間。教師はOODALループを回すことで「指導の個別化」を図る

子ども一人一人がそれぞれの問いを

立てて、自分なりの学習方法でその解決に向かう教室は、予測困難な空間となる。教師も子どもも、必然的にVUCA空間の一員となるのだ。誰が、どのような学びを行うのかを予測することはある程度可能だが、まず予測通りにならない。教師が適切な助言や価値付けをするためには、子どもの様子を瞬時に観察し、かかわりながら状況を理解し、判断をして声掛けをする必要がある。これは、PDCAサイクルというより、OODALループ(観察(O)・状況理解(O)・決める(D)・動く(A))を回すイメージだ。状況理解を進めるためには、個々が本時にどのような問いを立てたかを可視化することが必要だ。筆者は、子どもがMicrosoft Formsに入力した前時の振り返りを参考にしたり、本時の問いをミニホワイトボードに書かせたりして、可視化を図った(図4)。

このように、教室をVUCA空間にすることで、少しずつ時代の要請に応える言語能力を育むことができるだろう、と私は考えている。

教師主導の予定調和な授業を行ってきた私たちにとって、これを脱却し、子ども主体の予測困難な授業への移行は、先が見えず怖いことかもしれない。だが、時代の変化に伴って社会や企業が変革を続ける中、教室の中がいつまでも旧態依然としたままでは、いけないだろう。



図4

児童生徒は、タブレット端末を家庭に持ち帰り、宿題や調べ学習、反転学習等に活用しています。

中学校では、学習アプリを活用することで、定期テストを廃止し、教員のテストづくりや採点業務を軽減しています。また、教員はアプリの学習履歴を確認しながら評価に活用することもできます。

各小中学校において、タブレット端末を授業等での学習と家庭に持ち帰っての学習とによるハイブリット学習を進めています。

さらに、コロナ禍やインフルエンザ等の学校・学級閉鎖に備えて、オンライン学習（Zoom）を行ったり、町のケーブルテレビで学習内容を放映したりと町独自の「学びの保障」の確保に努めています。



●ケーブルテレビによる学習の放映

コミュニティ・スクールと地域の教育力の活用



平成 29 年度に福島県モデル地区として地域学校協働本部事業を開始し、学校応援事業・放課後子ども教室事業・学習支援事業・家庭教育支援事業等の事業を地域コーディネーターが窓口になった取組を積極的に行いました。こうした地域の教育力を活用した取組が評価され、平成 30 年度に文部科学大臣表彰を受けました。

学校運営協議会が学校運営の方針を示し、地域学校協働本部が学校運営の推進力となって、自転車の前輪と後輪のごとく地域の教育力を取り入れた「地域に開かれた学校」を進めています。

●地域の教育力を活かした地域学習

「心の居場所」家庭教育相談室の設置

平成 29 年に小学校舎内に開設された家庭教育相談室「こころのオアシス」は、子どもや保護者、地域住民の子育てや家庭での悩みの相談など、地域の子育て支援の窓口として機能しています。今では、教室になじめない子どもや不登校の子どもの心の居場所になっています。

「こころのオアシス」は、小学校 1 階に設置され、校舎内を通らずに、直接外からも入ることができます。町で雇用する相談員が 2 名常駐し、いつでも相談できる体制をとっています。昨年度の相談件数は、児童生徒約 700 件、保護者約 120 件で、「学校であって学校でない」場所として、多くの方に利用されています。

昨年度、「こころのオアシス」活動の成果が高く評価され、文部科学大臣表彰を受けました。



●こころのオアシス

アントレプレナーシップ教育の推進



中学校では、「産官学民連携教育プラン」の特色ある教育活動として、「アントレプレナーシップ教育」を行っています。武蔵野大学アントレプレナーシップ学科の教授や学生、さらに地域おこし協力隊、地元の社団法人等の協力で、中学 2 年生の生徒が町の活性化に向けたアイデアを探究しています。生徒のアイデアは、町が進めている町民参加型プラットフォーム「デンディム」を活用してオンライン上に公開し、実現に向けて地域の意見を取り入れています。

生徒の新しい学びの力として取り組んできた結果、平成 29 年度に文部科学大臣表彰を受けました。

●アントレ教育で地域課題を探究

おわりに

西会津町では、誰一人取り残すことのない特色ある教育を進めてきた結果、ここ数年で、3つの文部科学大臣表彰を受けることができました。この度のコロナ禍を経験する中で、予測困難な時代を生きていく子どもたちを育てていくためには、教師が「子どもを教え育てる学校」ではなく、子どもたちが自ら課題をつかみ、自ら答えを出していく課題解決学習に取り組むことにより、「子どもが育つ学校」づくりを進めていくことが重要であると考えます。これからも、新しい時代を切り開く人材を輩出するよう邁進してまいります。

きょういく 見聞録

「不易流行」を教育基本に 「産官学民の知のリソース」を活用した教育の創造

西会津町は福島県会津地域の西に位置し、新潟県に隣接している人口約5,700人の町です。縄文時代の土器等の遺跡が多く発掘され、歴史と文化、豊かな自然に恵まれています。明治時代には、研幾堂という渡部思斎を塾長とする私塾があり、塾生の中には、野口英世の手を治療した渡部鼎や、自由民権運動を全国に波及させた塾生等がいました。

町ではこの研幾堂にちなんで、「西会津こども研幾塾」を開設して、人材の育成に取り組んでいます。また「不易流行」を教育の基本に、「産官学民の知のリソース（資源）」を活用し、地域の教育力を生かしながら「地域に開かれた学校」を進めています。

福島県西会津町教育委員会 教育長 江添 信城

「不易流行」を融合する教育

西会津町は、豊かな自然と地域学校協働本部事業の「地域の教育力」を活用した教育に取り組んでいます。この体験的な活動や基礎・基本となる学び（不易）は、子どもたちの「非認知能力」を育成して、テストなどでは数値化されない「人生や将来を豊かにする力」となっています。

学校は、西会津町の自然や歴史、文化、産業等の学習を教育課程に位置づけて、地域コーディネーターが窓口となって地域学習を行っています。

また、予測困難な時代を生きていく子どもたちに、「産官学民の知のリソース」を活用し、学校にはない資源を外から取り入れ、既成概念にとらわれず新しい学び（流行）と融合させた教育を推進しています。

西会津こども研幾塾による人材育成

「人づくりは町づくり」との町長の思いから、町長自らが塾長として「西会津こども研幾塾」を開設しています。塾は、毎年6月に開塾し、11月に閉塾するまでの半年間に12回開催されます。町の不易である自然、歴史や文化を地域の方から直接話を聞いて学んだり、会津の民芸品である赤べこの絵つけや地域伝統の出ケ原和紙の手すきの体験活動をしたり、オンラインを使った西会津出身の企業家による講話を行います。また、ロボット相撲のプログラミングやドローン操作、3Dプリンターを使った作品づくり等の最先端技術を体験します。閉塾式では、子どもたち一人一人が持続可能な町にしていくための対策として人口減少問題、空き家対策、移住定住問題等を子どもの視点で考えて発表します。閉塾式の最後には、子どもたち自らが書いた和紙の修了証が町長から授与されます。



●西会津こども研幾塾開塾式

「産官学民の知のリソース」を活用した教育



●民間企業によるプログラミング教室

各学校では、「産官学民連携教育プラン」の基本理念のもと、学校教育や生徒指導、特別支援教育の充実に努めています。

特に「令和の日本型学校教育」へ向けて、「新しい学びの創造とエビデンスの構築」を旨として取り組んでいます。これまでは、「経験と勘と気合い」と言ういわゆる3Kの教育が、ややもすると行われていました。しかし、子どもたち一人一人のエビデンスに基づく指導を行う必要性があります。そのため、学校にはない外の資源として、「産官学民の知のリソース」を活用し、多くの企業、文部科学省、県教育委員会、会津大学、福島大学等と連携した教育を進めています。

また、GIGAスクール構想により、各教室には電子黒板やパソコン、アップルTVを整備し、ICTを積極的に活用した授業を進めています。一人一台のタブレット端末を活用することで、新たな学びの姿が生まれてきました。

全家庭にインターネット環境が整備され「学びの保障」を確保

町では、山間部等のデジタル放送の難視聴地域があることにより、町内全域にケーブルテレビ回線を整備しています。現在は、光ケーブル回線に替え、契約家庭ではインターネットを利用できます。児童生徒の家庭でインターネット未契約の家庭に対して、町が費用の補助をすることで、すべての児童生徒の家庭でインターネットへの接続が整備されています。



静岡県伊豆市

天城連峰太鼓 代表 堀江 富男

地域に支えられ、愛されて35年 天城連峰太鼓の取組

平成元年に結成した天城連峰太鼓はその名を天城連山からいただき、地域興しの目的で昭和63年11月23日にスタートしました。以来、国内外のさまざまな大会で公演を行い、和太鼓の素晴らしさを伝えてまいりました。地元の学校の部活指導を行うなど積極的に地域と交流し、子どもたちの学びのために学校・地域・保護者が一丸となっています。私たち天城連峰太鼓の活動をご紹介します。

天城連峰太鼓について

天城連峰太鼓は設立当初はメンバーも少なく9人から始まり、「夢は全国レベル」を掲げて精進してきました。その後、地元の小学5年生に木端太鼓を教え、当時2校あった小学校の活動に関わりました。平成11年には全国植樹祭に出演し、天皇家下の御前で総勢百名余で演奏することができました。

現在では週3回の練習を行っており、子どもたちは全国ジュニアコンクールに向けてがんばっています。練習の日は保護者のかたがたに送迎の協力をお願いします。

全国ジュニアコンクールでは、平成12年全国優勝、平成16年2位、全国6位は平成18年、20年、22年、24年、26年等、結果はついてきていま

す。出演した子どもたちのその後の成長を見るのが楽しみです。

学校の部活指導も積極参加

私どもは地元の学校部活動の指導にも尽力しております。平成8年には伊豆総合高校の前身である修善寺工業高校に郷土芸能部を設立、太鼓の指導に関わるようになりました。その後、2校が統合して伊豆総合高校が新設されましたが、その一年前の平成21年には全国高校文化祭において全国優勝を手に入れました。

沼津学園飛龍高校では平成17年に和太鼓部を設立、毎日の練習を通じて人づくりを motto に日々精進してまいりました。平成26年には内閣府より青少年地域交流表彰を受け、平成30年には長野県で行われた全国



●凛とした表情が美しい

●カー杯の演奏でバチが折れることも



●会場には大勢の観客が詰めかけ、勇壮な演奏に酔いしれた

●週三回、練習に励む



●「先輩たちのように格好よく打てるようになりたい」



●「練習は辛いときもあるけれど、本番でみんなに喜んでもらえたり、褒められたりすると嬉しい」



●代表の堀江さんとメンバーの子どもたち

我々天城連峰太鼓の指導方針は、第一に挨拶をきちんとすること。そして優しさ・思いやり、目的意識をもつ人間になること。協調性のある人間、しっかり謝罪のできる人間になれるよう、皆で話し合いながら取り組んでいます。

これからも地域に根ざした太鼓チームとして、また、地域の伝統文化となるべく精進してまいります。

太鼓を通じて子どもたちの人格形成

高等学校総合文化祭において優秀賞をいただき、東京国立劇場での優秀校公演にも参加。文化庁長官賞もいただくことができ、子どもたちにとって大変な自信となりました。毎年、在校生とOB・OGの合同演奏会を開くなど交流を続け、部員一同、練習に励んでいます。

東京

未来を切り開く力の育成 —クラウドファンディングを活用した 起業家教育を通して—

稲城市立南山小学校 校長 山根 まどか

本校では、梨の生産量が東京都で一番という市の特色を生かして、総合的な学習の時間を中心に、3年生では近くの梨園で梨の花の受粉や袋掛け、収穫等を体験的に学び、6年生では稲城市の魅力を考え、広める活動を行っています。広める方法としては模擬会社を設立し、地元の企業等の協力を得て魅力が伝わる商品を開発し、クラウドファンディングを活用して発信しています。

模擬会社を設立する際には、地域の税理士や起業家から会社の組織やしぐみ、やりがい等について教わります。そして、児童は社長・副社長、経理部、デザイン部、広報部、ウェブ部、販売部等に役割分担をして、商品の選定、デザイン、資金計画、宣伝について考えて準備を進め、保護者や地域の方へ説明を行った後クラウドファンディングのサイトに公開し、支援いただいた方に返礼品を届けます。

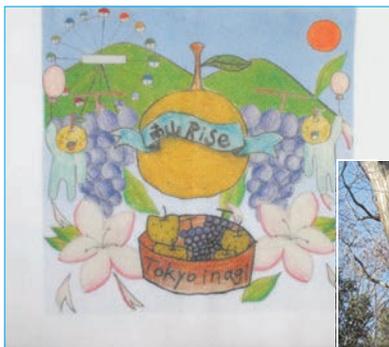
実際の商品を扱うので、自分たちの考えを保護者や地域のかたがたに伝えた上で意見を伺って修正したり、思いが伝わるように説明や広報の仕方を工夫したりする等、児童は創造性を発揮し、他者と協働して責任をもって課題を解決していきます。また、自己を活かす役割を担うので、一人一人が主体的に取り組みます。そして、利益が出たら梨の生産の振興や地域の自然の保全のためになることに使う等、具体的な目標を設定して活動します。

クラウドファンディングの公開終了後は、返礼品として商品を提供し、アンケートで感想や励ましをいただくことにより、児童は稲城市の魅力を広められたと達成感をもつことができます。

今後も家庭や地域のかたがたと連携・協働して、児童が社会の中で自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現するための可能性を引き出していきます。



QRコードでクラウドファンディングのサイトをご覧ください。



令和3年度のクラウドファンディングの返礼品と、利益で購入して近くの里山に設置したフクロウの巣箱



全国各地のさまざまな取組を紹介します。

全国

「中高生日本語研究コンテスト」 を知っていますか？

専修大学 教授 山下 直なおし

日本語学会では2022年度から「中高生日本語研究コンテスト」を開始しました。中高生に日本語に関心をもってもらい、言語や言語文化への探究心を育むとともに、学校現場と研究者コミュニティーをつないで、日本語学の知見を活用してもらうことなどをねらいとしています。

記念すべき第1回のコンテストは2022年9月1日から9月30日を応募期間として、研究計画を5分程度でプレゼンする「アイデア部門」と、分析結果を示し結論までを10分程度でプレゼンする「リサーチ部門」の二つの部門を設けて作品を募集しました。

学会としても初めての試みでしたが、アイデア部門44件、リサーチ部門23件、あわせて67件という多くの応募がありました。内訳は中学生が12件、高校生が55件、参加してくれた学校数は30校に及びました。また、個人による作品は41件、2人以上のグループによる作品が26件でした。

コンテスト実行委員と学会理事あわせて28名の審査員による審査の結果、アイデア部門では最優秀賞1件、優秀賞5件、奨励賞3件、リサーチ部門では最優秀賞1件、優秀賞4件、奨励賞1件の合計15件が表彰作として選ばれました。表彰式は2022年10月29日にオンラインで開催された日本語学会秋季大会の式典の中で行いました。

惜しくも選に漏れた作品にも独創性のある意欲的なものが多く、全ての作品に対して評価できる点や今後考えてみるとよいところなどについて、審査員からのコメントを送っています。

日本語学会では第2回のコンテストも実施します。今回も多くの中高生の皆さんからの応募をお待ちしています。日本語に興味はあるが、何をどのように研究すればよいかよくわからないというかたがたには、日本語研究のトピックや方法をわかりやすく説明した動画をホームページに掲載したり、学会所属の研究者によるサポートサービスを行ったりしていますので、どうぞご活用ください。



中高生日本語研究コンテストの詳細についてはホームページでご確認いただけます。



愛知

全国最大規模のロボットによるプログラミング教育

津島市教育委員会 教育長 浅井 厚視

愛知県津島市では、令和4年9月より、AI機能をもった人型ロボット（シャープ・ロボホン）とレゴブロックを各小中学校に21体ずつ、それぞれ252体導入した。全国最大規模のロボットの数で、楽しく役に立つ「きらりと光る津島の教育」を目ざすことにした。人型ロボットは、プログラミングを見える化する手立てである。

8月に教員向けの研修会。10月から子どもたちに向けて、外部講師による機器の活用の授業がスタートした。市ではプログラミング教育を通して、筋道を立てて考える論理的思考力を育てたいと考えている。また試行錯誤をすることで、友達と対話しながら、考えを柔軟に修正する力を育てたいと思っている。このような教育を通して、理数科の好きな、ものづくりに関心をもつ子どもたちを育てたい。

10月、津島市立南小学校6年竹組（宮川勇作教諭）で総合「はじめよう！プログラミング学習」（10時間完了）の授業を行った。「LEGO SPIKE プライム」を使い、「ブレイクダンサーを組み立て、プログラムを組んでいろいろな動きを楽しむ」学習を行った。授業では「チュートリアルを視聴」し、3人1組で「ブレイクダンサーを協力して組み立て」「プログラムを組み替えて、いろいろな動き」を試した。最後に本時の学習を振り返り、タブレットに入力した。この授業では「自分で考えた動きをするため、必要なコードを組み合わせ正しいプログラムを組むこと」を狙いとしました。

今後はプログラミング教育のカリキュラムカレンダーを作成するとともに指導事例を着実に増やしていきたいと考えている。一度、津島市のプログラミング教育をご覧ください。



ロボットを組み立ててプログラミング

神奈川

学校を拠点とした学区全体での防災まちづくり

横浜市立太尾小学校 校長 館 雅之

太尾小学校は、地域、保護者の皆様が学校運営に参画する気風があり、防災まちづくりを進める理念「ふるさと太尾構想」を共有し、防災まちづくりを持続発展させています。

太尾小学校防災拠点訓練は、発災時に家の中で身を守る家庭内避難訓練から始まります。次に、初期消火・救出救護等を各自治会等で工夫して行います。その後、校庭で多様な訓練を行い、全校児童と保護者が授業として参加しています。その際、地域防災拠点運営委員会、お父さんたちの会、PTA、教職員が協働作業を行います。

この訓練を通して防災・減災への意識が高まり、自分の命は自分で守る、隣近所で助け合う、その自助、共助を学ぶ学区全体の防災訓練とまちづくりを構築してまいりました。

これらの取組を評価いただき、令和2年度「防災まちづくり大賞総務大臣賞」、令和3年度「防災功労者内閣総理大臣表彰」を受賞することができました。災害で被災するのは最終的に個人と家庭であり、「自助力向上」こそ防災、減災の目標です。「共助力」は、本学区では「学区の防災マニュアル」が存在しているという、「公助（学校等）と地域、保護者の連携」が下支えとなっています。こうした防災まちづくりが持続発展していくよい循環ができています。

コロナ禍で多くの人が一同に集まることが難しくなりましたが、これらの取組は方法を変えながら実施しています。8月にはコロナ禍で長く実施できていなかった「太尾小ふるさとまつり」を縮小規模ではありますが3年ぶりに実施することができました。

学校を核とした地域防災の取組の継続は、地域の防災意識の涵養につながっています。そして、これらの経験を積み重ねた子どもたちが、将来地域の防災活動の中心を担うことになることを願っています。



地域防災拠点訓練



地球となかよし メッセージ

第20回

今までの作品は、絵のすばらしさや説明文のなかにある新しい視点に基づく作品が多かったように思います。今年は、日常生活にあるごく身近な回りにある物をもとに、地球の負担を考えた作品が多かったように思います。

評：審査委員長 角屋重樹

入賞作品発表

◎後援／環境省、日本環境教育学会、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

学校賞：北海道 札幌市立豊園とよその小学校

一人一人の協力で地球を守ろう

石谷 優佳 海外 日仏文化学院パリ日本人学校 3年

イタリア・サルデーニャ島のペローザ海岸に行きました。ここは、海岸の浸食を抑制し、環境を保護するために、毎日、入場する人数が制限され、ゴザを使うことがぎむづけられています。

日本の畳と同じ「い草」で作られたようなゴザです。なので、私達もゴザを持って、海へ行きました。

ゴザは、布せいのシートなどに比べて、砂浜の砂が吸い付き可能性が低いので、砂を持って帰られる量がへり、真っ白な砂浜を守るため、とても大切なことだそうです。

日本で親しみのあるゴザがきれいな海と砂浜を守るため、とても有効に活用されていると知り、嬉しくなりました。

一人一人の小さな協力が、地球の自然環境を守ることにつながるのだと思いました。



評 この作品の特徴は、日本の畳にもある「い草」というごく身近な物から地球の自然環境を守ることを考えたことです。

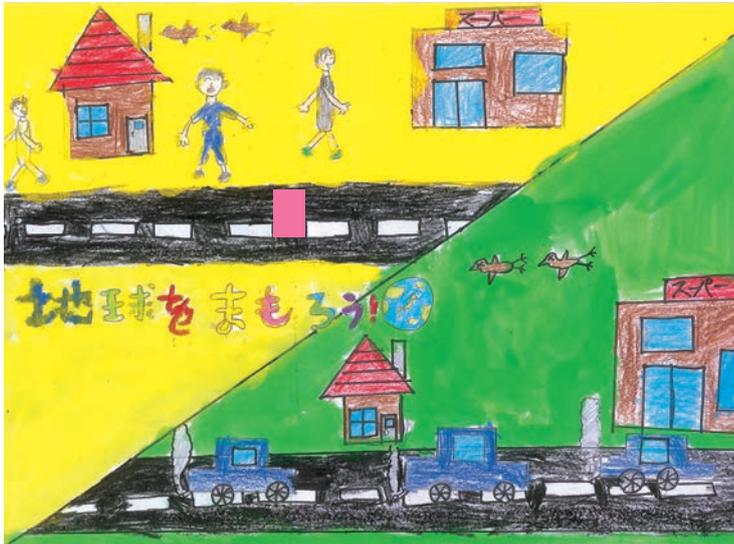


あるいていこう

大野 颯佑 福岡県 大牟田市立吉野小学校 4年

この作品には、ちかいところは車じゃなく歩いていって、車からだすはいきガスの中にある高熱をあまりださないようにして、地球のかんきょうがよくなってほしいという思いがこめられています。

ちかいところは歩いていって、電気自動車をふやして、かんきょうのいい未来になってくれるとうれしいです。



評 この作品は、「歩く」というきわめて身近な日常的行動から「地球の環境」を考えたことが特徴です。



たすけて！ゴミを出さないでください！



シェルトン未来 海外 中部テネシー日本語補習校 6年

どこに行ってもいつもごみが身の回りにあります。海に行っても山のてっぺんに行っても、ごみはどこでもついてきます。それは、私の学校のカフェテリアでも起こっています。カフェテリアの給食では、たくさんの発泡スチロールの皿と、プラスチックのパッケージに包まれたフォークやスプーンを毎日使い捨てています。私の学校だけで、約920人の子供たちが、発泡スチロールの皿とプラスチックのフォークやスプーンを使って、一週間に約4,615個が捨てられています。地球が大きなごみ箱にならないように、これらの素材を再利用できるものに変えていくことが必要だと思います。

評 この作品は、発泡スチロールなどが学校でたくさん使われ、捨てられているゴミの量から、「地球環境」を考えたことが特徴です。

わたしのおとうさんは、おにわでおやさいをつくっています。ミニトマト、きゅうり、なす、ピーマンです。なつ休みにたくさんできたので、わたしもお手つだいをしました。でも、へんな形のおやさいもできました。見た目がわるいので、わたしは、たべたくなかったけれど、たべてみたらぶつうのおやさいと同じあじでおいしかったのでおどろきました。おかあさんが、見た目のわるいおやさいは、うりものにならないと言っていました。同じおやさいなのに、かわいそうだと思いました。これからは、見た目がわるくてもすてないで、おいしくたべようと思います。



形のへんなはたけのおやさいたち

ふるかわ かがり 古川 華雅理 東京都 日野市立夢が丘小学校 2年



評 この作品の特徴は、野菜の形に注目し、見た目の悪さと野菜の味との関係をもとに、物事の判断の仕方考えたことです。

アメリカのともだち

はつむら こうのすけ 初村 幸乃輔 東京都 中央区立久松小学校 1年



ぼくの三さいからのともだちが、おとうさんのしごとのつごうで、アメリカにてんこうしました。ぼくは、ちきゅうぎでアメリカと日本がどれだけとおいかをみました。ひこうきで、ちきゅうのうえをとおったのかな、ちきゅうのよこをとおったのかな。日本のはんたいがわですが、ちきゅうぎでも、ひとつの世かいとおもいました。もっと世かいのくにや、ひととなかよしになれるように、いろんなことをしりたいとおもいました。



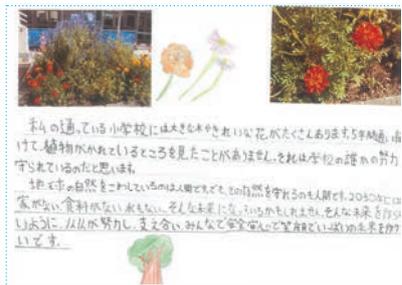
評 この作品の特徴は、アメリカに行った友だちの場所を地球儀で調べ、日本の位置関係から「仲よくする」重要性に気付いたことです。

私の通っている小学校には大きな木やきれいな花がたくさんあります。5年間通い続けて、植物がかれているところを見たことがありません。それは、学校の誰かの努力で守られているのだと思います。



みんなで守る地球の自然

うえき ちはる 植草 千晴 東京都 小平市立第五小学校 5年



地球の自然をこわしているのは人間です。でも、その自然を守るのも人間です。2030年には、家がない、食料がない、水もない… そんな未来になっているかもしれません。

そんな未来を作らないように、一人一人が努力し、支え合い、みんなで安全・安心で笑顔でいっぱい未来を作りたいです。

評 毎日通っている学校の花壇の植物が枯れたことがないことから、自然を守る大切さに気付いたことが特徴です。



ちきゅうさんありがとう

しょうじ なつき 徳島県 藍住町立藍住西小学校 2年
庄司 菜月



わたしは、花やきれいな海が大すぎです。
だから、ちきゅうに「ありがとう」の気持ちをつたえたくて、友だちと花かんむりのプレゼントをしたいと思って、この絵をかきました。
これからも、大きな花や海をだいじにして、たのしくらせるちきゅうをもっとたいせつにしたいです。

【評】この作品は、大きな花やきれいな海などがある地球に対する気持ちを、心温まる絵で表現していることが特徴です。

入賞作品

みんないっしょ

ベツォルト エマ こころ 海外 シンガポール日本人学校 クレメンティ校 2年
心美

わたしのおかあさんは、日本人で、おとうさんは、ドイツ人です。
ひさしぶりに夏休みにかえったドイツであそんだいとこちや、あたらしくできた友だちのかみや目やはだの色はちがいました。



でも、とてもなかよしになりました。
わたしのすんでいるシンガポールのお友だちも、色んなくにの子がいます。見ためはちがうけれども、みんなわたしのかぞくやお友だちです。これからずっとです。
大人の人たちも、ちがうくにどうしなかよくしたら、せかいがもっとよくなるのになと思いました。

入賞作品

たねのさいりょう

あなはら ひなの 東京都 日野市立夢が丘小学校 2年
穴原



みなさんは、たべたあとにのこったたねをどうしていますか。たねにもいのちがあるのを知っていますか。わたしは、すいかやいちごやみかんのたねなどをとっておいています。
一年前、わたしはアボカドをたべていました。アボカドのたねは、丸くてピンポンだまくらい大きいです。このたねをそだててみることにしました。

はじめに、たねにようじをさして、水にうかべました。みるみるうちに、下から白くてすこし太いねっこが、すう本はえてきました。つぎに、うえきばちに土を入れてうえました。
今は、くきが太くなり、はっぱもいっぱいはえています。ごみとしてすてられていたはずのたねも、そだててあげればすてきないのちを見せてくれるのです。

入賞作品

きれいなあさがお

のむら かおり 東京都 小平市立第五小学校 1年
野村 香有



デイサービスにいるおじいちゃんたちに、あさがおをプレゼントしました。
あるくのがゆっくりだから、へやであさがおをみて、なつをっしてほしいとおもったからです。

入賞作品

地球に自由を

おくだ こうた 千葉県 市川市立大柏小学校 6年
奥田 航大



地球は今、人間に汚され、壊される、そんなものに縛られています。例えば掃除を1時間しても、汚すのは5分ほどで1時間前と同じようにできます。このように、汚すのは簡単ですが綺麗にするのは大変です。
汚すのを地球で繰り返すと、地球は泣いてしまいます。ですが、みんなが意識をもって取り組んでいけば、地球は笑ってくれます。
なので、身のまわりのことを見直して、地球をきれいにしていくことが今、人々がするべき行動だと思います。



入賞作品は弊社ホームページからもご覧いただけます



入賞作品

朝のひみつ

鈴木 敦士 埼玉県 私立星野学園小学校 2年



ぼくは三才から、毎年、朝顔を育てています。今年は、ひみつの計画を立てました。それは、朝顔がさくところを見ることです。今まで、朝顔は朝が来ることを知ってさくんだと思っていました。でも、知ってしまいました。太やがしずんで、十時間たつとさくようになっていると本に書いてありました。

そこで、朝四時にベランダに出ると、朝顔はつぼみを少しふくらませて、今にもひらきそうです。じーっと朝顔を見はると、ぱちんとほどけて、空にそまらようにゆっくり大きく広がってピンクの花が開きました。朝のひんやりした空気と朝顔がぼくにシャキッと元気をくれました。

ぼくは、今年もありがとうと、来年も大切に育てると朝顔に約束をしました。

入賞作品

スーパーミキサーしゃ

中村 亮介 海外 ハノイ日本人学校 1年



このミキサーしゃは、なかにゴミをいれると、まわって、さっき入れたゴミが、ちぎゅうにいいものにかわってできます。

きやはっぱや、つぼみやはながでできます。いつか、じぶんでうんでんしてみたいです。

入賞作品

地球の友達 人力車

田口 咲晶 海外 香港日本人補習授業校 4年

今年の夏休みに、浅草ではじめて人力車にのりました。人力車はガソリンやでんきなどを使わず、人の力でうごくるものです。

かんきょうにやさしいのりものが、車やバスとおなじどうるをはしていておどろきました。

浅草には、むかしからつくこうげいひんをうっているおみせがたくさんあることを、車夫のおにいさんにおしえてもらいました。

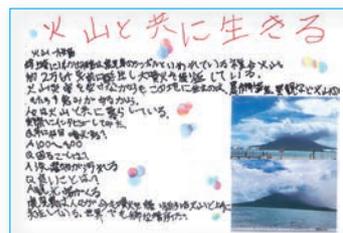
でんとうぶんかがないけんできて、かんきょうにやさしい人力車は、これからもずっとはしつづけてほしいです。



入賞作品

火山と共に生きる

江平 成秀 埼玉県 富士見市立水谷小学校 5年



火山・桜島
 錦江湾に浮かぶ桜島は、鹿児島県のシンボルといわれている複合火山。約2万6千年前に誕生し大噴火を繰り返している。

火山災害を受けながらもこの地に住むのは、農産物や温泉、景観など火山のもたらす恵みがあるから。人々は火山と共に暮らしている。

実際にインタビューしてみた。

Q 年に何回噴火する？ A 100～800

Q 困ることは？ A 洗濯物が汚れる

Q 良いことは？ A 観光客がくる

鹿児島は人々が今も噴火を繰り返す活火山と上手に共生している、世界でも稀な場所だ。

◎審査委員(敬称略)

- 角屋 重樹 広島大学名誉教授
- 井上 由美子 環境省 大臣官房総合政策課環境教育推進室 室長補佐
- 大矢 伸一 毎日新聞社教育事業室プロデューサー
- 太刀川 みなみ 日本環境教育学会理事
- 鈴木 元 NPO 法人ビーグッドカフェ 全国小中学校環境教育研究会 研究広報部長
- 伊東 千尋 町田市立小中一貫ゆくのき学園校長 教育出版 代表取締役社長



入賞作品

日本と中国のかけ橋となった楽器

藤田 歓苗・藤田 柚葉・伊藤 愛純 海外 上海日本人学校浦東校 5年

中国には伝統的な楽器がたくさんあります。その中で琵琶(ピパと発音します)は日本の琵琶(びわ)の祖先です。また洞簫(ドンシャオ)は、竹の縦笛で日本の尺八の祖先です。そして、



私たちはその楽器に実際にふれる機会があり、歴史を感じることができました。漢字も楽器も中国から日本に渡って来たので、2つの国の文化が似ているんだなと思いました。

これからの中国生活でも、日本と中国の似ているところ、ことなっているところを見つけていきたいです。中国と日本の交流が、これからもっと大きく発っていきように、私たちががんばりたいです。



『草枕』脱線雑談①

こんな時だからこそ、芸術

【連載第1回】(全3回)

洋画家 寺久保文宣ふみのり

夏目漱石の小説『草枕』には、芸術論と芸術的生活、要するに慌ただしい近代生活の中での風流生活のおもしろき知恵、あるいは非常に冷めた視線のようなものが散りばめられています。『草枕』が書かれたのは日露戦争終了の翌年で、小説の舞台は日露戦争のさなかのことです。この国家と民族の存亡を賭けた大戦争に、わが国は大きな代償を払い国民は忍耐を重ねて勝利したものの、日清戦争勝利の時のような大きな受益も無く、日比谷焼き討ち事件に代表される憤怒の民衆暴動が起こり戒厳令も敷かれるなど、戦後の世相は大変荒れておりました。

「智に働けば角が立つ、情に掉さおさせば流される、意地を通せば窮屈だ、とかく人の世は住みにくい。」という冒頭は有名ですが、続いて、この世の住みにくさを深く悟ると自ずから詩が生まれ絵ができるとし、そして芸術を為す全ての者はこの世を長閑のどかにし人の心を豊かにする故に尊くあり、世間的な患いを取り除いて有難い世界を目の当りに写すのが芸術であると語られます。

こんな時だからこそ、芸術あるいは芸術的精神での鎮静が必要、と言っているように感じられます。

ところで、暴動の責任を取って桂内閣が倒れ、西園寺公望が総理大臣となり、日展の前身である文展（文部省展覧会）

の第1回展が開催されました。文展は国費で行われた大美術展でした。大暴動も起きた翌年、外国から借りた戦費の借金も膨大にして、よくそんな時に開催しました。『草枕』が書かれた翌年です。

西園寺さんはお公家さんでしたが、戊辰戦争では軍服を着て鉄砲持って最前線で戦いました。廻りのお公家さんたちは彼のいで立ちにビックリしたのですが、西園寺さんは、「そのうちこの姿がフォーマルになるんだぜ」なんて言って。維新後すぐにフランスに政治学を学びに行ったのですが、ナポレオン3世の帝政が倒れ、パリコミュニケーションという革命暴動が起き、西園寺さんはそれに出くわしたのです。戊辰戦争から西南戦争までのおよそ10年間の戦死者は約2万5千人くらいですが、パリコミュニケーションは1週間で死者約3万人の凄まじさ、セーヌ川が血で真っ赤に染まった。西園寺さんは心底「革命はいかん！」と思ったとのこと。そして、暴動でポロポロになってしまったパリの街を芸術家たちが率先して一生懸命復興させようとしている姿に大変感心感動したのでした。文士は秩序の回復を訴え美術家が町を直し音楽家が街角で演奏する、そんな光景を見た西園寺さんが総理大臣になったので、ようするに、こんな時だからこそ美術展を開催しよう、という思いもあったのかもしれない。

ちなみに東京美術学校（芸大）の創立は西園寺さんが文部大臣の時でした。総理大臣になった際には、蒼々たる文人たちを私邸に招いてサロンも開設しました。もちろん漱石先生も招待されたそうなのですけど、超俗の士の先生はご辞退されたそう。

今回は、「あわれ、はつまり感動！」です。



▲西園寺公望



▲夏目漱石

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

寺久保文宣 (Terakubo Fuminori)
白日会会員・常任委員、日展特別会員。1964年埼玉県生まれ。1990年、東京藝術大学大学院修了。2001年、日展特選受賞(01、05)埼玉県知事賞受賞。2003年に個展を開催(日本橋三越本店)(06、10、14、20)。2019年、白日会第九十五回記念展にて内閣総理大臣賞受賞。その他、個展・グループ展多数。

地域の実践からこどもの貧困に立ち向かう



東京学芸大学・こどもの学び困難支援センター 講師
たしま ひろき
田嶋 大樹

東京学芸大学こどもの学び困難支援センターでは、貧困、虐待、不登校という現代の社会・教育課題に対応した3つのプロジェクトを立ち上げ、「学びを拓く」をキーワードに実践研究に取り組んでいます。連載2回めの今回は、その中から貧困研究プロジェクトの取組をご紹介します。

このプロジェクトでは、沖縄県名護市のこども食堂との連携による実践を核にして、地域の居場所からみえるこどもの「学び困難」の様相や特徴を明らかにし、支援の充実に寄与する学校・福祉機関との連携のあり方について研究すること、こどもたちが学ぶ楽しさに出会い、地域社会につながりを形成しながら成長していけるような居場所運営モデルを開発すること、居場所運営への学生参加を通じた学校教員・教育支援者養成の仕組みを開発することを主な目的として取組を進めています。

核となる実践は毎週水曜日。こども食堂と学芸大をオンラインでつなぎ、こども食堂の現場には地域の支援者や大学生が、学芸大からは大学生と教員が参加し、チームワークを発揮しながら2種類の学習支援（個別学習支援・プロジェクト活動を通じた学習支援）を実施しています。

個別学習支援は、対話を通じた学習ニーズの理解に基づき実施しています。学習の形は、授業の予習・復習に限りません。油絵、リズムゲーム、小説創作等々、こどもたちの「やってみたい」という気持ちから始まる活動を共にする中で、多様な形で展開する学びを支援しています。

プロジェクト活動を通じた学習支援は、地域固有の資源を題材にして実施しています。これ

までに、名護の特産品シークワサーを使ったスイーツの創作・販売プロジェクトや、地域のビール製造工場で排出される麦芽粕、酵母粕を使ったアップサイクル商品（「沖縄 Taco スパ」）の開発・販売プロジェクト等を実施してきました。プロジェクト活動を通じてこどもたちを応援してくれる地域の大人たちも増えてきています。



▲創作スイーツの試作品を見せ合う様子

こうしたこども食堂の活動の中では、こどものさまざまな情報にふれることがあります。こどもの学習活動の様子、興味関心、その時考えている事、悩み事、衣服や身体の様子から家庭の生活状況が窺い知れることもあります。こうした情報は、複雑な家庭環境を抱えていたり、不登校状況にあったりするこどもの場合、そこでしか把握できない貴重な情報であり、多機関連携の中で支援のために活用し得る情報である可能性があります。プロジェクトでは、こども食堂が把握し得るこどもの情報が、学校や福祉機関との連携の中でどのように活用され、支援に役立てられるのかについても研究を進めているところです。

実践研究はまだまだ試行錯誤の連続ですが、引き続き多くのかたがたのご協力を賜りながら、こどもたちの笑顔のために取り組んでいきたいと思っています。

障がいもいじめの経験も、 全ては美しい音色にかえて

ほ・つ・と・な・出・会・い

バイオリニスト 式町 水晶さん



式町 水晶さん
が校長先生や
教育委員会に
かけ合っても
一向にいじめ
は収まりませ

バリリンピックで演奏を世界に披露

僕は3歳のときに脳性まひと診断され、運動と姿勢の機能障害があったので、リハビリのために4歳からバイオリンを習い始めました。母子家庭で経済的に余裕がなく、中学までは車椅子が欠かせなかったこともあり、バイオリンの習得は困難の連続だったのですが、すばらしい先生がたに恵まれて2018年にメジャーデビューを果たすことができました。

東京2020バリリンピック閉会式では「What a Wonderful World」を演奏する機会をいただきました。戦いを終えた選手の方々は互いに健闘を称えあい、本当に優しい笑顔で演奏を聴いてくださって、幸せな気持ちでいっぱいになりました。障がいをもつ一人のバイオリニストとして、あの場に携わらせていただけたのはすごく嬉しい思い出です。

いじめを機に闘争心に火がつく

小学校4年生までは特別支援学級や盲学校に通っており、それぞれ個別のカリキュラムがあったので競い合う環境もなく、のんびりマイペースな性格でした。しかし、6年生の時にひどく荒れている通常学級のクラスに入れられ、いじめを受けたことで人生も性格も一変します。

障がいをもっているというだけで弱くて頭も悪いと決めつけられ、暴言や暴力を受けました。母が校長先生や教育委員会にかけ合っても一向にいじめは収まりませ

ん。

誰も助けてくれないなら、障がいがあったも弱くないことをわかってもらおうしかないと思ひ、猛然と勉強するようになり、隠れて身体を鍛えるようになりました。がんばってもそれほど動けるようにはならないとお医者さんからは釘を刺されていましたが、トイレの個室に隠れてスクワットをしたり、土手で走り込みの練習をしたりして、すごくストイックで闘争心の強い性格に変わったのです。おかげで高校からは車椅子が必要なくなりました。

夢を叶えた代償

いじめがよっぽどトラウマだったのか、僕にとってはバイオリンよりもむしろ同年代の健康者を上回る身体能力をもつというのが命をかけても叶えたい夢でした。死に物狂いでトレーニングして腹筋は四千回できるようになり、ボクシングは12ラウンドフルで戦える体力をつけ、ようやく夢を叶えたとき、なんとこんな虚しいんだらうと大きな寂しさに襲われたのです。本当の強さはここにはありません。長年体へ負荷をかけて無理をしてきたせい、去年、脳梗塞になってしまいました。僕がもっとのんびり休みながら努力する性格だったなら、こうはならなかったかもしれない。身体が萎縮して動きづらくなってしまったので、今もリハビリやトレーニングは欠かせません。

小中学校で子どもたちに講演するときには、僕みたいにならないでねといつも言っています。みんななら僕みたいに一人で抱え込まず、友だちを大事にしながら夢や目標を叶えられははずだから、と。僕は障がいをもっていない友だちと仲よくなると闘争心が薄れてしま

うと思っていたので、自分から距離を取っていましたから。

講演を聞いて変化する子どもたち

「僕はいじめをしていたのですが、式町さんのお話を聞いて、もういじめはしないと決めました」と感想の手紙をもらったことがあります。「障がい者は弱いと思っていたけど、式町さんを見てそんなことはないんだと考えが変わりました」ともあって、すごく嬉しかったですね。

バイオリンの弦は張りすぎるとぶつんと切れてしまいます。バイオリンならいくらでもほかの弦に交換できますが、人の心は一個しかなく、お店で買えるものでもないのです。どうかがんばりすぎないでほしい。それは子どもたちだけでなく先生がたにもお伝えしたいです。

先生だから踏ん張って手本にならなければ、という場面はたくさんあるでしょうが、先生だって全知全能の神ではなく、一人の大切な人間。先生という職業は責任が重く、今の時代は茨の道かもしれないが、だからこそこの仕事を選ばれたかたがたは本当にすばらしい勇者だと感じます。どうか今後は先生がたのヘルスケアをもっと充実させ、精神面をフォローする機能が整備されることを祈っています。

式町水晶（しきまち みずき）

1996年北海道生まれ。3歳の時に脳性まひ（小脳低形成）と診断され、リハビリの二環として4歳からバイオリン教室に通い始める。5歳の時に網膜変性症・眼球運動失調・視神経乳頭陥凹拡大が見つかると、8歳で中澤さみ子氏に師事。10歳からは中西俊博氏の教えを仰ぐ。2018年にCD「孤独の戦士」でメジャーデビュー。コミック「水晶の響」（斎藤 倫著）で主人公のモデルになる。コンサート、ライブ、楽曲制作のほか、講演活動にも精力的に取り組んでいる。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆知っておきたい教育 NOW ②の実践論文に示唆を得ました。「気になる子」の捉えを「発達遅れ、知的な遅れまたはそれによらない身体面、……」と捉え直すことで、アセスメントツールで困り感を明確にして原因を探り対応策につなげることができると学びました。（沖縄県K.U）
- ◆庄内藩の致道館の教育内容に驚いた。会津藩や薩摩藩と違い、自学自習の時間が多かった。知識の詰め込みではなく自ら考え、学ぶ意識を高めることを重んじている。1805年頃から徂徠学の教えを基にした教育が行われ、現在も続けている鶴岡市教育に敬意を表する。（山口県T.T）
- ◆「ほっとな出会い」大野寿子さんのいいなと思ったらやってみようという考え方に共感しました。「ボランティアの3つのススメ」これくらいの軽さで気軽に、自分から楽しんで、まずはやってみることが大事。ボランティアに限らず、生き方の視点にもなります。（新潟県K.M）

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

教育出版は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています